

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和八年五月作品集

故郷

暁子

私は山口県の山村に生まれました。様々な表情を見せる自然の中に、古き時代の面影を残して佇む小さな集落です。故郷は常に無二のものですが、俳句に親しむようになって以来、その思いは一層強くなりました。彼の地で育ったことが、私の句作の大きな柱となっています。生家を継ぐ者がいて、今も時折、訪ねて散策する機会を持つことが出来るのは文字通り有難いことです。

春筍や深山の土の芳しき

今もなほ使う井戸水山躑躅

つばくらめけふは山家にややの声

水満ちて光の満ちて峡五月

日翳ればどこかがさやぐ青田かな

一村は川に沿うたり合歓の花

バス停は村の三叉路カンナ燃ゆ

拾ふ間も落つる音して栗林

ひと雨のありて匂へる刈田道

方々へ猪垣のびて峡の晴

《作品鑑賞》

辻純江

繊細な感覚で、よく季節感を捉えて、楽しい句が出来ていることに心をひかれました。

春筍や深山の土の芳しき

土が芳しいという感覚を、素晴らしいと思います。

つばくらめけふは山家にややの声

静かな山里に、赤ん坊の声は生きる希望ですね。

一村は川に沿うたり合歓の花

清らかな川に沿って、静かな山里の風景が目に見えます。

バス停は村の三叉路カンナ燃ゆ

今は珍しいカンナが、皆が集まるバス停に赤く咲いているのは嬉しいですね。

とても楽しく読ませていただきました。

山归来咲く山に聞き津山線

藪山を終へて払へる松落葉

郁子の花たまに人来る山といふ

四十雀四十雀ツツピーツツピー

縦走や新樹の先に盆地見え

出発は雨の日となり天魚釣

暁の山見えてくる天魚釣

天魚釣けふは新子のよく掛かり

落ち込みは目の高さなり岩魚釣

しばらくは夢に見るらん主岩魚

佐保光俊

由宇藤生駅のよき名も春の旅

のどかさの海を左に旅ひとり

まだ長けぬ声もまたよし匂鳥

かたかごの花訪ぬれば五輪ほど

幾重にも連なる山のみな芽吹く

思ふさま枝を広げよ里桜

たはむれに山の桜を数へけり

藤咲いて村あちこちの芳しき

この里のどこの畦にも金鳳花

鉢に水遣れば蝶々のひらひらと

高尾ひとみ

窓辺からつがひの蝶を見てをりぬ

看護師の香水の香のほのかなり

紫陽花の咲き満つる朝退院す

折鶴とあぢさゐを置き文机

爪切りしばかりの指に夏の風

病む足に絡みつきたる暑さかな

子と歩む谷の戸の坂青葉風

涼しさや山からの風身に受けて

ふいに向き変へてこちらへ夏の蝶

梅雨近し山にはチェーンソー響き

あざみ

鬼ごつこの声の響ける春の風

端午の日君にぴたりの折兜

空港に降りれば春の光の来

人気なき交番の横柳の芽

藻の花にそつと寄せたる素足かな

旅路きて仙台とうに春の色

病院の待合の混み春の昼

豆皿の空豆どこか楽しさう

父逝きし町美しく芽立時

筆ペンの文字の真黒春深し

はじき豆そつと耳朶押すやうに

懐かしき人の名を聞き春愁

メッセージカードは四角かすみ草

酔ふほどにぽんと飛び出すはじき豆

旅の果帰り支度の花の雨

碑のここにもありて草若葉

夏豆や先輩なれど無口なる

パエリアを取り分けてゐる春の昼

書き物を止めて本読む昭和の日

夏萩やときに弱音のほろほろと

春昼や犬と話すか妻の声

辞書引いて小説を読む春の暮

朗誦のおくのはそ道星涼し

鳥鳴いて舗道を跳ねる花の頃

読み終へし本置く窓辺春の雨

涼しさは光と影の美術館

川風が犬の毛を梳く五月かな

立ち止まり樟を見上ぐる暮の春

頬染むる息子と会ひぬ夏祭

朝霞港出でしか船の笛

亜矢

綾乃

井藤希

散る桜行く先を目で追うてをり

竹落葉きりもなく降る蔵の屋根

雨の朝椿の花の落ちてをり

えびね蘭庭木の下に二十年

青麦に沿うて短き電車行く

花蜂の止まり小花の揺れゐたる

郷の山母と海老根を探しし日

白丁花の垣までは行く夕散歩

蕨摘みつつ隣人は熊見たと

朝の道行けばさらさら笹の散る

雑魚釣つて子らの破顔や青葉潮

こしあぶら子が摘むやうに剪定す

風薫る病む人と見て飛行機雲

ほととぎす産土神へ磴けはし

一軒の団地の飲み屋花月夜

朝の日の差して香れり白牡丹

緑摘む鯉寄る池に梯子入れ

春眠しひとりの部屋のラヂオ音

玄関を開けて目に入る若楓

何処からも瀬戸の海見ゆ首夏の尾根

春筍を茹でつつ皆とティータイム

夏の朝裏富士見ゆる高速道

夕映えや高菜千切つて前垂れに

葱坊主切つて畑の仕事終ふ

高速道車窓に桐の花見えて

夏燕瞬時光りて過ぎにけり

東京へ車椅子での春の旅

山若葉話の切れぬ高速道

宮居から見晴らす瀬戸の夏霞

古き枝切りて二枝リラ咲けり

大畑恵

暁子

すみれ

春時雨カメラロールを遡り

外れたる天気予報や水温む

デンモクに上司の曲入れ水温む

春光や生まれる前の歌うたい

野うさぎの足の長さや春深し

先輩になりたる時や初桜

花明り編みかごの目を数えたる

花曇色の褪せたる滑り台

ビル群の中の桜に強き風

ロリータで散歩をしたる花月夜

竹田千紘

対岸ははや葉桜となりにけり

花樽いつもの橋に振り返り

黒雲の近づいて来る棕櫚の花

薫風や転がる帽子追ひかけて

やや顔を上げて薫風受けてをり

紅苺カートの一番上に乗せ

無人市に立ち寄つて行く緑雨かな

喜雨来る見知らぬ人と空を見る

浮草のかたまりのまま漂へり

老鶯の声しきりなり川の宿

知佳子

チューリップ幼子八つ数へたり

桜咲く公園一人散歩する

藤の咲く峠を越えて帰りけり

里に入るいつもの場所に黄山吹

溝浚へ済んでみんなで慰労会

白寿の母真紅の薔薇が好きと言ふ

代田搔き一晚経ちて水澄めり

蝌蚪の紐水田の隅に見ついたり

久々に母と帰るや代田道

故郷はすでに田植の始まりぬ

ちどり

花杏すこし冷たき風吹いて

初蝶のひらひら舞うて葉に止まり

安芸の地を出でて車窓に皐月富士

花卉の舞ひたる池の鯉の口

あと二日子の帰り待つ花の頃

遠足は解散夏の電車来る

散る花を追うて子の声弾みたり

麗かや庭園に見る地唄舞

鳩たちの歩く縁台藤の棚

花吹雪灯台までの坂上る

夫と立ち医院の庭に見る辛夷

雨粒を溜めて開いて白牡丹

ひとりでも生きよと桜吹雪かな

我が影とともに歩いて春の月

前後して錯綜も良し緋の牡丹

藤棚の花の長さを云々す

久々の友との登山山笑ふ

若竹の葉先数えて抹茶飲む

実桜の赤黒黄色踏んで行く

姉と居て見つめてゐたる遅桜

春昼や円を描いてクレープ屋

花苺隠るる雀飛ぶ雀

頬撫づる藤の花房昼さがり

人は立ち大仏は座す日永かな

山荘の石楠花咲くと知らせ来し

しんとした家にゆすらの咲いてをり

ゼリーには知らぬ果物ありそうで

糸とんぼ風に吹かるる葦の先

鉄線花けふの花数がぞへたり

旬ですと艶の苺を盛るタルト

辻純江

雲雀

ふじ女

蝶々のしばらく止まり母の墓

短夜や眼鏡のままに朝となり

道の駅駐車混雑みどりの日

妹の墓前に語る春の暮

芍薬を母の気に入る壺に挿す

夕虹や定期健診終へし街

桜蕊降るや生家を皆出でて

堀越しの柏葉紫陽花ひと触るる

青空に白雲流れ杜鵑花園

ベランダの硝子戸越しに花水木

真青なる空を仰ぎて朴の花

茎分けて根元に探す茗荷の子

浜風に押されて歩く夏隣

草莓玄関先に点るやう

夜濯の部屋干し軽き独居かな

夏に入る空映したる潮溜

十葉にとある看護師想ひたり

玻璃越しの病棟十階海朧

葉桜の風にブランコ揺れてをり

夏の月残りて梅花空木かな

良し悪しをすべて受け止め緑の夜

新緑の奥に鳴きたる鴉二羽

慰霊碑を覆ふがごとき花櫓

看護師の響く足音明易し

森に入り青葉時雨に打たれけり

薰風やミセス聴きつつ歩きたる

病室に取り込む換気風涼し

鯉跳ねて大きい水輪の立つ夏日

肌撫づる感覚茅花流しかな

青葉風一日ひと日を生きてをり

松田裕子

村上正人

森口良樹

初蝶のそばに来てゐる郵便受

流されて色増す蕊や落椿

鳥待ちてふと足元の土筆摘む

待合の窓辺に菫見てをりぬ

ここもまた雲雀の道やペダル踏む

花冷や送迎の日々思ひ出し

敷石に図鑑の浮かぶ春の庭

吾一人の谷の足音花辛夷

書を読み窓の外には柳かな

バス停に人影ふたつ藤の花

ねえママと声の聞こゆるチューリップ

泥水にうごめく蝌蚪や日は暮れて

十二単ひとり見てゐる葉の蒼さ

鳥の巣に翼の覗く木立かな

甲羅干しざばざば落つる春の池

レコードの浮いては沈む春の宵

放流の鯉に手を打ち春の池

ぐんと踏む自転車の先山笑ふ

狛犬のじつと見てゐる穀雨かな

我を見る亀の眼や春の昼

筍の手間を楽しむ齢かな

硝子戸の先に牡丹や琴を聴き

豌豆摘む指に風ある朝かな

絹莢や母がぱらりと寿司にのせ

裏木戸に鉢ひとつ見ゆ二葉葵

屋根の上の猫に触れたる柿若葉

青楓坂道をゆき坐禅組む

秋楡

今井淳子

なつ

裏山に石室のあり青き踏む

暮れ泥む古墳の静か竹の秋

リビングの壁に一匹春の蠅

父と子のシュートの響きタ永し

鳴き声に探せば小さき蛙かな

口寄せて蒲公英の絮吹いてをり

主なき山家の庭に雉鳴いて

前庭の若葉風受け出勤す

本降りの雨に旅立つ日の若葉

山野ウタ

風光る行つてみようか五橋へと

春の服アイロン掛けて出かけたり

花の雲吾子と二人で電車待つ

春雨の五橋を渡る二人かな

人影のなき庭園に春タ立

傘を差し躑躅見つめる二人かな

春深し吾子は地酒を選びをり

仲間へとおすそ分けする空豆よ

土肥律子

桜まじ稚児の冠鳴らしけり

風の揉む赤と白との牡丹かな

白牡丹青きガラスに差しておく

蓮浮葉水面に小さく二つ三つ

訪ね来る人のなき日のゼラニウム

花がらを摘むも楽しきゼラニウム

大御堂の内に見てゐる緑雨かな

蓮の花静かに立ちて水離る

桑門わかこ

山の道水田に動く雲を見て

雲動き日差しの動く水田かな

明日雨と牡丹切る日を選びつつ

黄の牡丹三輪残し切り終る

黄えびねの盛りや寺の奥深く

五月晴胸の鼓動をいつくしみ

夏蝶の二頭もつれて何処へ行く

紀英子

燕の子親鳥来れば声聞こゆ

愛鳥日肩にインコの止まりをり

草むらのゴミを拾へばポピー咲く

若葉寒コホンとひとつ咳の出で

立葵今年は白の咲き始む

青鷺の水辺に降るる音のする

上島康子

竹林に差し込む朝日夏きざす

夏めくや船はするりと岸に着き

葉桜の並木やビニール傘を差し

いつの間に雨雲の来て桐の花

上げ潮の川面に伸びて花櫓

朝夕にトマトの熟るる隣かな

熊谷ゆり子

庭の薔薇手折りて部屋に飾りけり

父植ゑし杜鵑花の傍に腰下ろす

墳丘に今日も咲きたる桐の花

葉桜の影濃き道に佇めり

葉桜や耳にワルツの残りゐて

日の中に草引く腕の止まらざる

いただきし木の芽を添へて夕餉なり

山躑躅壺に入れられ無人駅

目の前を行つたり来たり小灰蝶

荒れ果てし畑に大根咲きにけり

大木に絡む山藤見上げたり

ひとつ閉ぢまたひとつ咲き花菖蒲

筍の墓地の外れに出でにけり

曇天に色の濃くなり紅き薔薇

青空にアーチの薔薇の零れけん

軒先に蜂の出入りの薄暑かな

薄暑光芝にちよんちよん雀の子

大原良子

撫子

美耶

若草や石見神楽を舞ふ童

朧かな柩に入るるパスポート

一人食む卵かけ飯昭和の日

夫植ゑし杜鵑花の鉢の並びけり

五月晴一人で祝ふバースデイ

高嶋絹代

土蛙蚯蚓に跳びつく雨後の庭

初めまして三才の挨拶桜咲く

濃紫陽花吉備津神社に猫の居て

山芍薬七年ぶりの三日かな

夕暮の鐘の音のするとんぼかな

前田範子

風吹いて香りのつづく沈丁花

真つ直ぐに真つ直ぐに咲きチューリップ

八重桜お国訛りの聞こえる

飲み会の翌朝啜る蜆汁

日の暮れて散歩してをり亀の鳴く

みさ子

ついと来て空を斜めに初燕

小豆島ミモザの風の吹きにけり

短夜のページをめくる夢十夜

短夜やカノンの調べと朝を待ち

飾り窓に夫の写真と胡蝶蘭

森田敦子

履歴書に三つの和暦風薫る

若葉冷景品余るビールフェス

新緑や泣いて勝ちたる泣き相撲

雨の中田植見る子の髪そよぐ

一音づつ鍵盤にふれ夏の朝

山崎桂子

炊き立ての白米にのせ木の芽和

春満月両手を広げ包みたし

目が覚めてカーテンゆれて春半ば

墓参り母の日の花携へて

古川廣子

友と行く山の木立や風薫る

プチトマト心臓に効くと母の言ふ

母の日にみんなで食ぶる握り鮓

五月晴どこまで続く空と海

弥生

田の水に残雪の峰映る朝

兄弟で植うる稲苗父母偲び

山の上の田んぼは今も手で植うる

上條忠

山吹の枝垂れてはなほ乱れ咲く

おひたしの小鉢真つ白夏に入る

葉桜の木蔭を歩く並木道

志路猿

石室を出て蝶々のはらり来ぬ

薔薇咲くや枝挿し接いで五十年

雪柳揺れ止まらずなり花夢の里

僧寺から尼寺へと巡り雲雀鳴く

新緑のゆさゆさ揺るる朝の庭

満天星の花揺るる坂一休み

層塔の基壇につる青嵐

折紙の鯉幟文添へてあり

桜湯

松本卓士

やす保

芽山椒に止まれる虫の今朝も居て

フリージアでんでに伸びて咲きにけり

和田史子

令和年八年四月作品集より

大畑 恵 私の選んだ十句

残雪の稜線に聞く鴉かな

佐保光俊

ふじ女 私の選んだ十句
露の臺ただただ探す無言かな

佐保光俊

野に在れば野の花となり風信子

高尾ひとみ

野に在れば野の花となり風信子

高尾ひとみ

初音聞く出湯に母と並びゐて

綾乃

いもうとは紅椿吾は白椿

綾乃

饅頭に土筆の焼印旅の春

辻純江

パトカーの丸みに朝日春浅し

竹田千紘

春の朝膨らむ蕾にふれてみる

雲雀

潮干狩いつしか蟹を追うてをり

雲雀

雨粒を払うて牡丹母に見せ

村上正人

夕さりて谷に響けり時鳥

村上正人

春の暮れぽつりと口に「ありがとう」

森口良樹

転々と病院を変へ春を待つ

森口良樹

リサイタル終へて春野の回り道

今井淳子

山茶花の散りたるままに里の家

秋楡

たんぽぽや住み慣れし家子は発ちぬ

なつ

萌ゆる草を足元に待つ電車かな

今井淳子

今年また花の名覚え俳句せん

土肥律子

子の発ちて出勤の朝初燕

なつ